

マラキ書1-3章「主を恐れる仕え人たち」

1A 蔑まれる捧げ物 1

1B ヤコブへの愛 1-5

2B エサウのような蔑み 6-14

1C 主への敬い 6-10

2C 祭壇への冒瀆 11-14

2A 契約を破る祭司 2

1B 主の教え 1-9

1C 顔に糞を巻きちらす神 1-4

2C レビ人との契約 5-9

2B 離婚 10-17

3A 主の清め 3

1B 使者の到来 1-7

2B 十一の捧げ物 8-12

3B 互いに語り合う者たち 13-18

本文

私たちは、ついに旧約聖書の最後の書であるマラキ書に来ました。(マラキ書は新改訳聖書では4章ありますが、今日は3章までにします。内容がとても豊富なので3章までにして、4章は来週の午前礼拝で学んでみたいと思います。)

マラキ書を読んで、これがいかに新約聖書の舞台設定になっているかがよく分かりました。これまで分からなかった福音書の構成や中身がどのようなものかが、分かりました。福音書の四つがすべて、バプテスマのヨハネの宣教から始まり、そしてそのヨハネは祭司ゼカリヤの子であることが、手がかりになる知識です。そしてイエス様が宮の中に入り、宮清めを行ない、そして祭司長や宮を管理する者たちによって断罪されたことも、マラキ書に関わってきます。福音書が、マラキの預言にある祭司たちの腐敗に深く関わってくるのです。そしてそこから、私たちが、いかに神に対する祭司の務めを回復させなければいけないかも知りました。じっくり学んでいきたいと思います。

午前礼拝で話しましたように、時はハガイとゼカリヤが預言をした時から、百年前後の期間が経った後のことです。紀元前516年に神殿の工事が完成し、神殿における礼拝も回復しました。しかし、その後に礼拝の奉仕において倦怠期がやって来ました。私たちも新しい場所に移って来て、ここで主にお仕えするために、いろいろな喜びと情熱があります。けれども、時に同じこと、礼拝を繰り返していることに飽きて来るという、霊的危機が訪れます。しかし、それを主にあって底上げしな

ければいけません。主にあつて、しっかりと御霊による祭司として霊の神殿を建て上げなければいけません。

マラキが預言をした頃は、エズラがエルサレムに帰還した 458 年、ネヘミヤが帰還した 444 年の頃と重なっているのです。当時の様子はエズラ記やネヘミヤ記の中で伺うことができます。まずエズラが、ユダヤ人たちの中で外国人と結婚しているという報告が来た事件がありました(9:1-4)。

そしてネヘミヤ記 13 章には、なんと大祭司エルヤシブが、ネヘミヤのエルサレム再建工事に協力を反対した、地元の有力者トビヤと裏で結託していたことが暴かれています。神の宮の庭に彼の部屋があてがわれていました(1-9 節)。そして、イスラエル人が十分の一の捧げ物を怠ったので、レビ人に対する支給が滞って、それでレビ人や歌うたいがそれぞれの自分の農地に逃げ去ったことが書かれています(10-14 節)。いわば、生活に困って牧師が日曜礼拝で奉仕せずに仕事をしていたようなものです。それから、安息日における商売がありました(15-22 節)。主の礼拝を怠って、商売をしていたのです。それから、ユダヤ人の中での雑婚が発覚して、なんと祭司エルヤシブの息子が、エルサレム再建の反対したもう一人の有力者サヌバラテの娘と縁故関係にあったことが発覚したのです。

バビロン捕囚の後、帰還した民はペルシヤの支配下にありました。ですから、もはやダビデの世継ぎによる王国は存在せず、唯一、彼らを保っていたのは祭司の務めだったのです。そして、それは本質的に、神の民が神の民たらしめる重要な務めでした。イスラエルを神がシナイ山のふもとで召された時、彼らを「祭司の王国にする」と言われたのです(出エジプト 19:6)。祭司が神に礼拝を捧げることによって、神と交わることによって、神が世界を支配されるという国であります。そして、ペルシヤの支配の後にはギリシヤ、ギリシヤの後にはローマと、ユダヤ人はハスモン朝という王国を一時期持ちましたが、すぐにギリシヤとローマの政治の中で埋没しました。そして、イエス様が現れた新約時代にまで異邦人の支配は続きます。そして、教会は御霊によって、その祭司の王国を受け継いでいるのです。「イエス・キリストは私たちを愛して、その地によって私たちを罪から解放し、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。(黙示 1:5-6)」祭司の務めをしっかりと果たすということは、どういうことなのか？をじっくりと見て行きたいと思います。

1A 蔑まれる捧げ物 1

1B ヤコブへの愛 1-5

1:1 宣告。マラキを通してイスラエルにあった主のことば。

「マラキ」という名前は「わたしの使者」です。後で、預言の中にその名前が出てきます。

1:2 「わたしはあなたがたを愛している。」と主は仰せられる。あなたがたは言う。「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と。「エサウはヤコブの兄ではなかったか。…主の御告げ。…わたしはヤコブを愛した。1:3 わたしはエサウを憎み、彼の山を荒れ果てた地とし、彼の継いだ地を荒野のジャッカルのものとした。」1:4 たといエドムが、「私たちは打ち砕かれた。だが、廃墟を建て直そう。」と言っても、万軍の主はこう仰せられる。「彼らは建てるが、わたしは打ちこわす。彼らは、悪の国と言われ、主のとこしえにのろう民と呼ばれる。」1:5 あなたがたの目はこれを見て言おう。「主はイスラエルの地境を越えて偉大な方だ。」と。

主が彼らに語りかけられた初めの言葉が、「わたしはあなたがたを愛している。」というものです。その言葉をユダヤ人たちは心から受け入れていませんでした。主に仕えるという時に、私たちは何か教会で掃除をするであるとか、具体的に動く奉仕活動を考えます。いいえ、私たちが主に仕える者として初めにしなければいけないことは、神の愛を受け入れることです。心から、神がこよなく愛しておられ、私たちをキリストにあって選んでくださったことをしっかりと受け入れ、感動し、その愛に応答することが務めです。「1ヨハネ 4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」

そして、それは選びの愛でした。神が一方的にヤコブを愛されたその憐れみに、神が確かに彼らを愛しておられることの表れがあります。神の選びというのは、私たちの行ないとは関係ないものです。アブラハムもイサクも、その行ないだけを見れば、神から見捨てられてもおかしくない過ちを犯していますが、神は一切彼らを咎められず、むしろ祝福し、恵みを与えてくださいました。その選びが最も明らかな形で行なわれたのが、ヤコブです。先に母の胎から出てきたのはエサウなのに、弟のヤコブが生まれる前から、神の約束の相続者として選ばれていました。そして、ヤコブの人生はお世辞にも正しいとは言えませんでした。けれども、やはり神はヤコブを決して咎めることなく、むしろ彼を祝福し、ご自分を「アブラハム、イサク、ヤコブの神」と呼んで憚らなかつたのです。

しかし、ユダヤ人はバビロン捕囚を始めとして、今もペルシヤの支配下の中で苦しみから免れている訳ではないのに、「主がどのように、私たちを愛しておられるのか？」と彼らは問いかけたのです。私たちも同じでしょう、神の選びの愛は、決して私たちが苦しみから免除されることを意味しませんので、どうしてこれが神の愛なのか？とあって、疑ってしまうことがあります。

しかし主は、「わたしはエサウを憎み」という言葉を使われて、彼らを愛していることを敢えて強調されました。これは、憎たらしいという感情のことではありません。「エサウではなくあえてヤコブを愛する」という、堅い意思表示をしています。イエス様が、「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができます。(ルカ 14:26)」と言われた時の「憎む」と同じ用法です。神は、まったく恵みによって、私たちを敢えて愛し、祝福することを決めておられます！そして時は、バビロンから帰還してかなり経っ

てからです。オバデヤ書に、エドム人がバビロンによってエルサレムが破壊された時に、それを喜んで苦しむユダヤ人を傍観していた罪が書かれています。そしてエドム人が、高い山で自分たちは安全だと思っていた所、バビロンに攻め込まれ、建て直そうにも、そして後にナバタイ人たちによって首都ボツラから追われていきました。そして歴史の中で埋没して消滅します。しかし、ユダヤ人は困難に遭いながらも、確実に神に約束されたことが実現していています。

それで、「主はイスラエルの地境を越えて偉大な方だ。」とユダヤ人たちは感嘆します。イスラエルを選ばれた神ですが、イスラエルに限定されるのではなく、その地境を超えて、諸国の民に働きかけられる方であります。

2B エサウのような蔑み 6-14

ところが、です。主がエサウの俗悪な姿を憎まれましたが、その主に対する蔑みを、ユダヤ人たち自身が、ましてや主との交わりを堅く保っているべき祭司たちの心を蝕んでいっていたのです。エサウの俗悪さは、主の与えられる恵みを軽蔑していたことです。「創世 25:34 ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えたので、エサウは食べたり、飲んだりして、立ち去った。こうしてエサウは長子の権利を軽蔑したのである。」

1C 主への敬い 6-10

1:6 「子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。…万軍の主は、あなたがたに仰せられる。…わたしの名をさげすむ祭司たち。あなたがたは言う。『どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか。』と。

祭司において最も大切なことは、関係です。神との関係であります。ここにある、父と子の関係であり、また主人としもべの関係もあります。祭司にとって何が大事かと言えば、その活動そのものではなく、主の前に憩うこと、その御姿を仰ぎ見、主から聞いて、主に祈り、主と交わりを持つことそのものです。それから、兄弟たちと主にあって交わることもあります、その中で恵みを分かち合い、相手を祝福します。飽くまでも関係が大事です。私は、しばしば近隣のカルバリーチャペルの牧師や宣教師、また他の教会の奉仕者と交わりを持ちますが、その時に「こんな遊びのような時間を持ってしまっているのだろうか？」という、日本人にありがちな貧しい仕事根性が出てきます。しかし、キリスト者の務めというのは、主の前に留まるということが祭司の務めでありますから、そうした交わりはとても重要なのです。

終わりの日、困難の時と言われている終わりの日には、この関係でさえが壊れる試練の時であると言われます。「兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを死に至らせませぬ。(マタイ 13:12)」このように、自分自身を愛して、関係を顧みない流れが強押し

寄せている時世であります。それでマラキ書の最後は、主の来られる前に「父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。(4:6)」という働きがあります。ところが、祭司たちが、主の御名を敬うことなく、蔑んでいると主は叱責しています。

1:7 あなたがたは、わたしの祭壇の上に汚れたパンをささげて、『どのようにして、私たちがあなたを汚しましたか。』と言う。『主の食卓はさげすまれてもよい。』とあなたがたは思っている。1:8 あなたがたは、盲の獣をいけにえにささげるが、それは悪いことではないのか。足なえや病気のものをささげるのは、悪いことではないのか。さあ、あなたの総督のところにもそれを差し出してみよ。彼はあなたをよみし、あなたを受け入れるだろうか。・・万軍の主は仰せられる。・・

「主の食卓」とは、祭壇に捧げられる主に対する家畜のいけにえのことです。そのいけにえは、傷があったり、欠陥のあるものではあってはいけません(レビ 22:18-20)。主が聖なる方、欠陥のない方だからです。人間の世界でも、「敬い」というのは自然に身につけています。ペルシヤの総督に会う時に、このような贈り物を受け入れるはずがありません。私たちも、とても重要な人物に会う時にコンビニで買ったお菓子を持って行くでしょうか？私たちはかなり選んで、高価なものを選びます。しかし、主に対する捧げ物となると、おろそかになるのは、主への敬い、主への恐れがなく、その御名を蔑んでいることを示しています。私たちは、人間関係を重視しますが、なぜ同じような、いやそれ以上の敬いをもって、礼拝による主との交わりを重視しないのでしょうか？

私たちは、「心が大事なのだ」ということをよく話しますが、「行ないによって、その心が表れる」というのも真実です。礼拝において、その捧げる姿において、自分の心がどこにあるかが見えてきます。イエス様は、「あなたの宝があるところに、あなたの心もあるからです。(マタイ 6:21)」と言われました。

1:9 さあ、今、恵みを受けるために神に願ってみよ。これはあなたがたの手によることだ。神はあなたがたのうちだれかを、受け入れてくださるだろうか。・・万軍の主は仰せられる。・・1:10 あなたがたのうちにはさえ、あなたがたがわたしの祭壇に、いたずらに火を点ずることがないように、戸を閉じる人は、だれかいないのか。わたしは、あなたがたを喜ばない。・・万軍の主は仰せられる。・・わたしは、あなたがたの手からのささげ物を受け入れない。

主は、「このままでは、その捧げ物を受け入れることはできない」と言われています。主はむしろ、祭壇に欠陥のある動物を捧げることをないように、そこに火を点ずることのないよう、戸を閉じる者はいないか、と問われているほどです。いい加減な礼拝に対して、主は快く思っておられません。

2C 祭壇への冒涇 11-14

1:11 日の出る所から、その沈む所まで、わたしの名は諸国の民の間であがめられ、すべての場

所で、わたしの名のために、きよいささげ物がささげられ、香がたかれる。わたしの名が諸国の民の間であがめられているからだ。・・万軍の主は仰せられる。・・

マラキは、主から御国の幻を見せられています。思い起こせば、アブラハム、イサク、ヤコブに対して主が与えられた約束は、「あなたによって、すべての国民が祝福を受ける。」というものでした(創世 12:3)。したがって、地の果てから果てまで主の御名があがめられ、恐れられるのは、当然と言えば当然なのです。イエス様は、「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、それから、終わりの日が来ます。(マタイ 24:14)」と言われました。そして再臨されたら、世界でイエス様の名があがめられます。

私たちは、先々週、カリフォルニアで宣教大会に出席しましたが、文字通り世界中から、世界各地から、主が力強く働いておられる証しを聞くことができました。世界の各地で、福音によって人々の生活が変えられています。私たちよりも、もっと困難な状況の中で、はるかに悪い環境の中で、喜びをもって主の言葉を受け入れています。

1:12 しかし、あなたがたは、『主の食卓は汚れている。その果実も食物もさげすまれている。』と言って、祭壇を冒瀆している。1:13 あなたがたはまた、『見よ。なんとうるさいことか。』と言って、それを軽蔑する。・・万軍の主は仰せられる。・・あなたがたは、かすめたもの、足なえのもの、病気のものを連れて来て、ささげ物としてささげている。わたしが、それをあなたがたの手から、喜んで、受け入れるだろうか。・・主は仰せられる。・・

主にいけにえを捧げることに嫌気が差している状況です。礼拝そのものへの批判であります。いかがでしょうか、主の御名をあがめること、礼拝を捧げることが、世界中で勢いよく、爆発的な喜びをもって行われている中で、肝心の主のおられる神殿において、これだけ主が愛しておられ、選んでおられるところで、その礼拝を忌み嫌っているのです。そしていい加減になっています。異邦人の中でイスラエルの神の御名があがめられ、肝心のイスラエル人の中で蔑まれています。異邦人とユダヤ人があべこべになっています。しかし、私たちも同じ過ちを犯す危機があります。礼拝について良い環境が整っているのに、それに文句を言っているのであれば、イスラエル人と同じ過ちを犯しています。

1:14 群れのうちに雄の獣がいて、これをささげると誓いながら、損傷のあるのを主にささげざる者は、のろわれる。わたしが大いなる王であり、わたしの名が諸国の民の間で、恐れられているからだ。・・万軍の主は仰せられる。・・

誓願を立てるいけにえは、自発的なものです。けれども、誓いを立てたのであれば、それを守らなければいけないという掟があります(申命 23:21-23 等)。つまり、主にいけにえを捧げると言い

ながら、実は損傷のあるいけにえを捧げるのであれば、それは人目にはよく見えますが、主の前ではそうではないという偽善であります。人の目にはよく、神にしか分からない領域ではいい加減にしています。主はこういった偽善を、忌み嫌われます。

そして、その根拠が、主の御名が諸国の民の間で恐れられているからであり、大いなる王であるからだということです。私たちの周囲の人々に対して、その人々が主の御名をあがめるようになることが主の御心なのに、肝心の選ばれた私たちが御名を蔑ろにしたのであれば、それは悪い証しを立てることになります。避けなければいけません。

2A 契約を破る祭司 2

そして2章に入ります。1章は、いけにえをないがしろにすることに主は注目しておられましたが、2章は、祭司自身が主の命令から離れている事について、主が叱責されます。

1B 主の教え 1-9

1C 顔に糞を巻きちらす神 1-4

2:1 祭司たちよ。今、この命令があなたがたに下される。2:2 もし、あなたがたが聞き入れず、もし、わたしの名に栄光を帰することを心に留めないなら、..万軍の主は仰せられる。..わたしは、あなたがたの中にのろいを送り、あなたがたへの祝福をのろいに変える。もう、それをのろいに変えている。あなたがたが、これを心に留めないからだ。

主の命令に聞き従わなければ、呪いが来るということは、モーセが申命記 27-28 章などで語ったことでした。そして、主の御名に栄光を帰さないということであれば、そのように祝福が呪いになるということです。事実、そうなりつつあるということです。主の祭司は、神の恵みを受け取り、そしてそれを民に分かち合うことによって、民がその祝福を受けるのですが、その流れが止まることを意味します。エサウが、どのような思いをもっていたかを思い出してください、そして神の呪いがなぜエドム人に襲ったのかを思い出してください。彼は主のものを蔑ろにただけでなく、ヤコブに対して恨み、いつまでも恨み続けました。その苦い根と高ぶりによって、彼は自分自身を滅びに向かわしめました。その呪いを、祭司たちが主の命令に聞き従わず、主の御名に栄光を帰していないので、彼らにも襲い始めているということです。

一見、礼拝を捧げているようで、真実ではない偽りの礼拝は、必ず私たちの交わりを汚します。例えば、兄弟の悪口を言うことについて、ヤコブが諭します。「ヤコブ 3:9-11 私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことがあるでしょうか。」兄弟を悪く言っているのであれば、それは神に対して呪っている、悪く言っていることと同じで、神から流れる

祝福の泉ではないところから、苦い水が流れているだけです。

2:3 見よ。わたしは、あなたがたの子孫を責め、あなたがたの顔に糞をまき散らす。あなたがたの祭りの糞を。あなたがたはそれとともに投げ捨てられる。2:4 このとき、あなたがたは、わたしが、レビとのわたしの契約を保つために、あなたがたにこの命令を送ったことを知ろう。・・万軍の主は仰せられる。・・

イスラエルの子孫を主が責めたということは、ゼカリヤ書でも学びましたが、福音書の中でイエス様が預言されました。羊飼いであるはずの祭司長たちが、羊たちを養わず、自分たちの權益を守ったので、それで神殿そのものがローマに破壊され、イスラエル人たちは世界に散り散りになりました。そのことによって、新約聖書に出て来る祭司たち、ユダヤ人の指導者たちは、すっかり汚名を被っています。それはあたかも、顔に糞をまき散らされているような状態です。祭壇にいけにえを捧げる時、汚物が出てきますが、祭りの時のいけにえの汚物をかけると主は言われています。喜びと楽しみの祭典であるはずのものが、究極の恥をもたらすということです。そして、それはレビとの契約を保つために必要なことだ、とあります。真実な祭司の務めが残るために、偽物の祭司は裁かれなければいけないからです。

2C レビ人との契約 5-9

次に、まことの祭司の姿、本来の祭司の務めの姿をマラキが預言します。

2:5 わたしの彼との契約は、いのちと平和であって、わたしは、それらを彼に与えた。それは恐れであったので、彼は、わたしを恐れ、わたしの名の前におののいた。

祭司の務めの第一の特徴は、「いのちと平和」です。神の命にあずかり、そして神の平和をもたらします。そして第二の特徴は、「わたしを恐れ、わたしの名の前におののいた」であります。主を恐れる思い、恐れかしこむ姿、それから主の御名があがめられるところで、その聖さに触れて、恐れおののくことです。

2:6 彼の口には真理の教えがあり、彼のくちびるには不正がなかった。平和と公正のうちに、彼はわたしとともに歩み、多くの者を罪から立ち返らせた。

祭司の第三の姿は、「真理の教え」です。神の真理、神の言葉をまっすぐに伝えることです。それから、第四に、不正がなく、「平和と公正のうちに、彼はわたしとともに歩み」とあります。公正であること、えこひいきがないことです。これは難しいことで、私たちはどうしても、人を見た目に判断し、えこひいきしてしまう傾向を持っています。しかし、公正に接することです。それから第五に、「多くの者を罪から立ち返らせた」であります。人々が悔い改めに導かれる時に、祭司の務めを果たし

ていると言えるでしょう。

2:7 祭司のくちびるは知識を守り、人々は彼の口から教えを求める。彼は万軍の主の使いであるからだ。

第六の祭司の姿は、「知識を守」ることです。しっかりと神についての知識を守っています。それで人々が教えを彼の口からききます。そして、これこそが万軍の主からの使い、メッセンジャーです。マラキの名前のように、主の使いです。

2:8 しかし、あなたがたは道からはずれ、多くの者を教えによってつまずかせ、レビとの契約をそこなった。…万軍の主は仰せられる。…2:9 わたしもまた、あなたがたを、すべての民にさげすまれ、軽んじられる者とする。あなたがたがわたしの道を守らず、えこひいきをして教えたからだ。」

祭司の行なうことで呪いは、「多くの者を教えによってつまずかせ」ることです。それは、公正に教えるのではなく、えこひいきして教えていることです。つまり、主の顔を伺うのではなく、人の顔を伺っていることです。パウロが、そのような教師がいることを背景に、自分たちがそうではないことを弁明している箇所があります。「1テサロニケ 2:4-5 私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。」そして、人にへつらう教師は、いずれ、人々から蔑まれ、軽んじられるようになります。

2B 離婚 10-17

そして、次は霊的な倦怠の中でも深刻な出来事です。先に触れた、「異邦人との結婚」です。

2:10 私たちはみな、ただひとりの父を持っているではないか。ただひとりの神が、私たちを創造したではないか。なぜ私たちは、互いに裏切り合い、私たちの先祖の契約を汚すのか。2:11 ユダは裏切り、イスラエルとエルサレムの中では忌まわしいことが行なわれている。まことにユダは、主の愛された主の聖所を汚し、外国の神の娘をめとった。2:12 どうか主が、このようなことをする者を、たといその者が万軍の主にささげ物をささげても、ひとり残らずヤコブの天幕から断つてくださるように。

神との関係があり、そして神が男と女に造り、神がひとりであられるように二人を一心同体にしたというのが結婚です。これは、神との関係、祭司のあり方にとって根本の所、核となる部分です。神は、「ただひとりの父を持っているではないか」と仰っています。神と人との関係は一対一です。一つに結ばれた仲です。これを破棄することは、どれだけ大きな傷を残すか、またそれがどんなに

酷い裏切り行為であるかを、神はここで指摘しておられます。

結婚だけでなく信者の交わりもそうですが、イエス様は一つになることを願っておられるのは、ご自身と父が一つであるところに基づいています。「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにいるようになるためです。(ヨハネ 17:21)」そして一つであることによって、世がイエス様を信じるようになると言われていています。ですから、主に対する反逆、裏切り行為、つまり一つにされているのに、反対側に付くということは、悪魔から来ています。悪魔自身が反逆によって裏切り行為をし、コラの反乱の時もそうですし、十二弟子の一人、イスカリオテのユダもそうですし、裏切りや分派に対して神はことさらに厳しい裁きを下しています。結婚であれば、平気で外国の女のところに行くということは、ヤコブの天幕、イスラエルの家を引き裂く行為であり、その者が断ち切れなければいけません。

2:13 あなたがたはもう一つのことをしている。あなたがたは、涙と、悲鳴と、嘆きで主の祭壇をおおっている。主がもうさげ物を顧みず、あなたがたの手から、それを喜んで受け取らないからだ。
2:14 「なぜなのか。」とあなたがたは言う。それは主が、あなたとあなたの若い時の妻との証人であり、あなたがその妻を裏切ったからだ。彼女はあなたの伴侶であり、あなたの契約の妻であるのに。

祭壇の涙と悲鳴と嘆きは、離婚された妻たちのものであると考えられます。簡単に離縁した男たちのいけにえは決して受け入れない、と主は言明しておられます。契約というもので結ばれたのに、それを破棄したのですから、確実に裏切り行為です。そして大事なものは、礼拝をそれでも祭司たちが行なっていたということです。主は、そのような偽善の礼拝を受け入れないということです。

2:15 神は人を一体に造られたのではないか。彼には、霊の残りがあつた。その一体の人は何を求めるのか。神の子孫ではないか。あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。あなたの若い時の妻を裏切ってはならない。2:16 「わたしは、離婚を憎む。」とイスラエルの神、主は仰せられる。「わたしは、暴力でその着物をおおう。」と万軍の主は仰せられる。あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。裏切ってはならない。

ここに、イエス様が教えられた結婚の背景があります。イエス様は、「ふたりの者が一心同体になるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。(マルコ 10:8-9)」と言われました。マラキは、それを「一つになった霊」として語っています。肉体が結び合うだけでなく、霊も主にあつて一つになるので、それを引き離すことは、暴力に等しいのです。そして、「神の子孫」とあるのは、主を恐れる夫婦の間に生まれた子のことです。神を恐れる子孫を離婚によって絶やすという警告です。そして、主は繰り返し「霊に注意せよ」と言われます。心がかたくなであるから、離婚するのだとイエス様は、離婚

状についての律法について説明されました。これを聞いていたユダヤ人の宗教指導者は、度肝を抜いたことでしょう。

それゆえ主は、「離婚を憎む」と言われます。それは、離婚をした人々を憎みなさいという意味ではありません。人が離婚をすれば、これだけの被害が出るのだ、人に不幸をもたらすのだ、という意味で憎むことです。「暴力でその着物をおおう」とありますね。当時、着物を女に覆うことによって、「私は生涯、あなたを守る」という意志を男が示します。ルツ記でルツがボアズにこれをしてくれと頼みましたね。けれども離婚をすることによって、彼女に暴力をふるっていると咎めておられます。神の痛みを感じますね。本人たちが痛んでいるより、神ご自身が何よりも痛んでおられます。

2:17 あなたがたは、あなたがたのことばで主を煩わした。しかし、あなたがたは言う。「どのようにして、私たちは煩わしたのか。」「悪を行なう者もみな主の心になっっている。主は彼らを喜ばれる。さばきの神はどこにいるのか。」とあなたがたは言っているのだ。

離婚のことについて、心を神は痛めておられるのに、それ以前に、彼らは開き直っていました。それは神の裁きがないように見え、悪を行なっても何も都合の悪いことは起こっていないと言っていたのです。ですから、悪を行なっても祭儀を取り仕切っている限り、主の御心になっっているのだとしてしまっていることです。罪を犯しているのに、それでも教会の奉仕につかせているときに、主は私たちの「大丈夫だ」ということばで、私たちはこの方を煩わしていることとなります。

3A 主の清め 3

そして 3 章から、主がこうした腐敗した祭司の務めに対して、使者を遣わして清めの働きを行なわれることが預言されています。

1B 使者の到来 1-7

3:1 「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている。」と万軍の主は仰せられる。

「見よ。」という言葉から始まります。4 章の始めも、「見よ。その日が来る。」とあります。主が、この状況に対して裁きを行なわれるのです。ここに書かれているのは、二種類の使者です。第一に、「彼はわたしの前に道を整える。」使者であります。今、マラキ自身が、その名の通り道を整えていると言えますが、福音書はバプテスマのヨハネがこの預言を成就させたことを話しています。この箇所が引用されて、それでバプテスマのヨハネが荒野で現れて、「罪が赦されるための悔い改めのバプテスマを説いた。」とあります(マルコ 1:4)。ですから、福音書はマラキ書の続きと言っても過言ではありません。マラキが語ってから、既に四百年以上経てからのことなのですが、主がヨ

ハネを遣わされて、ついに預言者の語っていた時代がやってきたのです。

けれども、もう一人の使者がいます。第二の使者です。この方はイエス・キリストご自身です。そして主が「神殿に来る」というのは、イエス様が神殿で宮清めを行われた時に実現しました。その公生涯の初期(ヨハネ 2:13-22)と十字架につけられる最後の週に行なわれました。そして、「あなたがたが望んでいる契約の使者」とありますが、契約とはエレミヤが預言した新しい契約のことでしょう。主が、新しい契約の約束を叶える方が来られるのだ、そして神殿の清め、礼拝の清めを行なわれるのだということです。

3:2 だれが、この方の来られる日に耐えられよう。だれが、この方の現われるとき立っていられよう。まことに、この方は、精練する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。

これは、主が初めに来られた時よりも、再び来られる時のことを指しています。実は終わりの日について、4章において、さらに明らかにマラキは語ります。主が来られる前に、エリヤが来るということです。バプテスマのヨハネが、エリヤの霊と力によって来ることを御使いガブリエルが話しました。けれども、エリヤそのものではないことを、イエス様は弟子たちに説明されました。イエス様が来られた時も、エリヤに働かれたのと同じ御霊の働きでヨハネは来たのですが、終わりの日には、ご自身が再び戻る前に、エリヤが来るということです。黙示録 11章にて、神殿のところで、エリヤと似たような感じで預言を行なう、二人の証人がいます。その時も、エルサレムはソドムとかエジプトと呼ばれるほど退廃していて、外庭は異邦人に明け渡されており、妥協に妥協を重ねていました。そこに二人の証人が来ますが、その一人がエリヤではないかと思われます。

「まことに、この方は、精練する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。」と主は言われますが、つまり、滅ぼすために来られるのではなく、あくまでも懲らしめて、清めるために来られるということです。ペルガモの教会で、バアルの教えを奉じている人々がいるけれども、「だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。(2:16)」とされています。悔い改めない時の剣であります。そのことは、とても辛いことでしょう。火の中を通るようなもの、クリーニングに使う時の洗剤であります。

私たちが、いつ、このことについて不純物を主に清めていただくかで、その大変度が決まってきます。コリント第一には、自分で自分を裁けば、裁かれることはないと教えています。けれども、それをしなければ、主によって裁かれる、けれどもそれは懲らしめであって、罪に定められることのないようにするためであるとあります。そして主が来られる時に、火の中をくぐるようにして助かるとあります。「もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。(1コリント 3:15)」

3:3 この方は、銀を精練し、これをきよめる者として座に着き、レビの子らをきよめ、彼らを金のよう
に、銀のように純粹にする。彼らは、主に、義のささげ物をささげる者となり、3:4 ユダとエルサレ
ムのささげ物は、昔の日のように、ずっと前の年のように、主を喜ばせる。

主が、最後にはレビ人を清めてくださいます。列記とした祭司の王国を打ち立ててくださるので
すが、ここで捧げられるものが、「義のささげ物」です。これは、神の正義を行なっているという捧げ物
であり、それは、「昔の日のように、ずっと前の年のように、主を喜ばせる」とあります。これはいつ
のことでしょうか、アベルの時、ノアの時、そしてアブラハムの時から祭壇でいけにえが捧げられ、
王ダビデが、主の前に捧げたいけにえがあります。ダビデは王でありながら、祭司のようにして主
の前に出て、主を求め、主を知ること熱心でありました。ゆえに、彼は祭司ではなかったものの、
彼の統治には、神の国の原型があったのです。ダビデが捧げたのは、単なる動物のいけにえ以
上の、賛美のいけにえであり、感謝のいけにえ、喜びのいけにえ、従順のいけにえ、そして義のい
けにえでした。詩篇には、これらのいけにえのことが前面に出ています。

3:5 「わたしは、さばきのため、あなたがたのところに近づく。わたしは、ためらうことなく証人となり、
呪術者、姦淫を行なう者、偽って誓う者、不正な賃金で雇い人をしいたげ、やもめやみなしごを苦
しめる者、在留異国人を押しつけて、わたしを恐れない者たちに、向かう。・・万軍の主は仰せられ
る。・・

主が、使者によって、またご自身によって近づかれる時に、証人となられます。つまり、律法に逆
らって偽っている者たちの偽りを明らかにされるということです。誰も見ていなくとも、主はその隠
れたものを明るみに出します。そして、主を恐れない部分を取り除かれるのです。そして午前礼拝
で話しましたように、主の礼拝を蔑ろにしている者たちは、結局は、近くにいる人々、弱いけれども、
主に選ばれている人々を蔑ろにしていきます。他の人々にはへつらったり、良くしようとするので
すが、同じ信仰の共同体の人たちを押しつけていくようになります。

3:7 あなたがたの先祖の時代から、あなたがたは、わたしのおきてを離れ、それを守らなかった。
わたしのところに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたのところに帰ろう。・・万軍の主は仰せら
れる。・・しかし、あなたがたは、『どのようにして、私たちは帰ろうか。』と言う。

主は、それでも彼らをお見捨てになりません。ここで、立ち帰りなさいと命じられて、彼らが主のと
ころに戻って来ることができるようにされます。しかし、なんと彼らは愚かにも、どうやって帰ればよ
いのか？と問い質しています。自分たちが、いけにえを捧げながら、いかに主から心が離れてしま
っていたかを物語っています。どう悔い改めたらよいのか、分からないのです。

2B 十一の捧げ物 8-12

3:8 人は神のものを盗むことができようか。ところが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだでしょうか。』それは、十分の一と奉納物によってである。3:9 あなたがたはのろいを受けている。あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民全体が盗んでいる。

主は衝撃的なことを語られます。「あなたがたはわたしのものを盗んでいる。」と言われます。それば、大きな罪です。すぐに悔い改めなければいけません。けれども、どうやって盗んでいるのかという問いかけに対して、「十分の一と奉納物によってである」と言われています。十一の捧げ物について、午前礼拝でもお話ししました。これは、原型はアブラハムのメルキゼデクに対する捧げ物であります。キリストによる祭司としての働きと、王としての働きを受けて、それでその栄光に見えた感動によって、捧げる時の割合が十一なのです。そして、ヤコブも天のはしごを夢を見た時に、その大いなる約束と天からの祝福に感動して、その場では持ち合わせていませんでしたが、十一をお返ししますと言いました。そして、それが後にモーセの律法の中で組み込まれるようになります。主に自分自身を捧げているのであれば、文句なしに十分の一は主のものなのです。ですから、それを自分のところに置いているのは、盗んでいることに他なりません。

十一の捧げ物には、自分自身の霊的な祝福があり、また実際的な恵みの働きがあります。申命記 14 章 22-29 節には、収穫の十分の一を幕屋に携えて、そこで主の前で家族で食事をする事が書かれています。これはどういうことかと言いますと、「主の礼拝によって捧げるものは、自分で楽しむことができる」という原則です。主に捧げることによって、主の共同体の中で自分もその便益を得、しかも主との交わりの中でその財産を使うことができる、ということです。ですから、しばしば誤解されるのは、教会で提供されているものを使わないで、自分で買おうとすることです。そうではなく、献金をするのです。そして教会の予算で必要なものを提供し、それを自分自身が便益を得ることができます。もう一つは、レビ人のように教えること、礼拝を導くことに専念ができるようにすることです。主の前に出ること自体が霊的な奉仕ですが、そのために物質的な必要を満たすために、十一の収穫をレビ人のために捧げます。このこともまた、みことばを取り次ぐ者が、祈りと御言葉に専念することができるので、自分の便益となります。

3:10 十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。…万軍の主は仰せられる。…わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。3:11 わたしはあなたがたのために、いなごをしかって、あなたがたの土地の産物を滅ぼさないようにし、畑のぶどうの木が不作とならないようにする。…万軍の主は仰せられる。…3:12 すべての国民は、あなたがたをしあわせ者と言うようになる。あなたがたが喜びの地となるからだ。」と万軍の主は仰せられる。

「こうしてわたしをためしてみよ」という言葉がありますが、これは、11-12 節にある祝福の約束があるからです。主はモーセによって、土地が豊かにされることを約束されていました。つまり、主がみこころとしておられること、御国のために自分が豊かにされるということです。ある二人の夫婦のことを聞きました。一組は、いつもお金が足りないといって牧師に相談していました。もう一組は、不足はしていません。前者は、教会もあまり通っておらず、困った時だけ、相談したい時だけきます。後者は十一の献金だけでなく、しっかりと教会生活が根づいています。牧師は知っていました、収入としてどちらが多いかということ。前者の人のほうが、給与が高かったのです。けれども、袋に穴が開いているかのように、手元に残っているのが少ないのに対して、後者の人々はその与えられているものでやりくりして、満足し、十分に祝福されていました。

イエス様が約束されていたことがあります。「与えなさい、そうすれば自分も与えられます。(ルカ 6:38)」という原則です。与えたら取られると思っている人は、まだ飛行機に乗ったことがなく、空気に鉄の塊が浮くわけがないと思っているのに似ています。与えれば、与えられるという原理を神は与えておられて、飛行機が飛ぶのと同じように神は、施す者を豊かに恵んでくださいます。

3B 互いに語り合う者たち 13-18

以上の約束を聞いても、心を頑なにしているようです。それで主は次に、選別を始められます。

3:13 「あなたがたはわたしにかたくななことを言う。」と主は仰せられる。あなたがたは言う。「私たちはあなたに対して、何を言いましたか。」3:14 あなたがたは言う。「神に仕えるのはむなしいことだ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩いても、何の益になろう。3:15 今、私たちは、高ぶる者をしあわせ者と言おう。悪を行なっても栄え、神を試みても罰を免れる。」と。

主の戒めを守っても虚しいだろうと不信に陥っていて、また悪を行なっても報いはないだろうとうそぶいている者たちに対する言葉が次です。

3:16 そのとき、主を恐れる者たちが、互いに語り合った。主は耳を傾けて、これを聞かれた。主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、主の前で、記憶の書がしるされた。3:17 「彼らは、わたしのものとなる。・・万軍の主は仰せられる。・・わたしが事を行なう日に、わたしの宝となる。人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。3:18 あなたがたは再び、正しい人と悪者、神に仕える者と仕えない者との違いを見るようになる。

主が、ご自身を恐れる者たちに対しては、ご自分の名が語られている中で耳を澄ましておられて、それをしっかりと記憶の書、つまり心に留めておられ、報いを与えられます。そして神にとって宝の民となります。最後に、自分の子に対するように憐れみを示されるのです。これが、主を恐れる者に対する主の接し方です。そうでない者は悪者としてふるい分けられます。それについては 4 章で、裁きを見ます。違いが出てきます。

私たちは、教会形成において、霊的な底上げが必要です。主を恐れるということに、底上げの鍵があります。主を本気で取り組む、主の礼拝、主の教会を本気で愛していくということです。